

開催地名	高知県安芸市
開催日時	令和5年11月17日(金) 19:00～20:30
開催場所	安芸市防災センター
語り部	草 貴子 (宮城県仙台市)
参加者	自主防災組織 40名
開催経緯	30年以内の発生確率が70～80パーセントといわれる南海トラフ地震では、当市での被害も甚大と想定されている。しかしながら、活動がマンネリ化している自主防災組織もあり、実際に災害を経験された方から直接お話をさせていただくことで、防災意識の向上がはかれればということで実施した。
内容	<p>「私の3.11と明日への備え」</p> <p>(1) 紹介(市名坂東町内会)</p> <p>宮城県仙台市泉区にある市名坂東町内会は、働き盛りの40～50代の方や、単身赴任の家庭も多い。必然的に私達女性が立ち上がって作り上げ、加入数186世帯、今年で17年目を迎えている。役員9名が全員女性、設立2年目には集会所も建設した。</p> <p>集会所は災害時の事を考え、ライフライン復旧は電気が早いと想定し、オール電化。女性が中心ということ considering、対面キッチンや備品倉庫の収納の高さを低めにし、女性が使いやすい高さに合わせた。その他、トイレに汚物を入れる黒いゴミ袋や凝固剤、子供用に絵本やおもちゃなど、主婦目線で用意している。</p> <p>町内会活動は、身の丈に合ったもの、オリジナリティーのあるものとし、あくまでもボランティアであること、出来ることを無理なく行うこととしている。</p> <p>(2) 東日本大震災について</p> <p>3月11日14時46分、買い物をしていたところ大きな揺れに遭遇、自宅に急いで戻る途中、集会所の隣の公園に、町内の方々が集まっている光景が見えた。集会所を開け、女性と子供約100名が避難してきた頃、外は吹雪となった。指定避難場所は2km先の小学校。移りたい人には移動の指示を出すも、強い余震があり、皆さんがこのまま集会所での待機を選択された。その後は4名の役員で話し合い、会員も会員でない人も受け入れ、避難者の中からリーダー・副リーダーを決め、町内会はサポートする形で運営に入った。顔見知りではない同志のため、毎日午前・午後にお茶の時間を設け、交流を図った。地域では、電気は2～3日、水道は3～4日、ガスは1カ月で復旧したので、各自が持ち寄った材料で調理した。また学生からは何か手伝いをしたいと申し出があり、寺子屋という形で子供たちの勉強を見てもらうことにした。このような状況下、避難所は3月20日に閉鎖した。</p> <p>震災時という非常事態の中では、人の姿が良くみえるものだ。思いがけない優しい行動、嬉しい言葉をかけてくれる人がいる一方、自分の権利主張ばかりの人もいる。トイレ清掃当番表を作成したとたん自宅に戻る人。女は黙って、炊き出しでもしていると人。不満や希望を大きな声で言った者勝ちという状況では、人の心や今までの関係性を壊してしまうこともある。どんな災害よりも、非常時に垣間見える本来の人間性が一番怖い。</p> <p>(3) 大震災を経験して</p> <p>今後に向けて、町内会に未加入の方をどうしていくかが課題となった。街づくりは人づくり、人と人との繋がりが大事と感じ、未就学児を持つ母子を対象に子育て支援を週1回開始した。3人で始めた「ずんだっこ」も年間1500名も利用してくれるようになった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大で休館となった。</p>

震災から12年経ち、自助・公助への考え方も進化してきた。住民は、やってもらって当たり前ではない。災害は、役所だから役員だからと、決められた人だけで乗り切れるものではない。被災者全員で乗り切るものであり、各々の当事者意識が大切だ。

市名坂小学校区避難所開設委員会も発足した。女性ならではの視点を生かそうと、女性コーディネーター部門を設けたことが大きな目玉である。例えばタブー視されやすいトイレ問題。排泄は食べることと同様に重要である。特に女性は男性と比べ、尿漏れ、生理など抱える問題も多い。我慢をして感染症になるなど、二次災害に繋がることも考えられる。プライドを傷つけずに対応していく為にも、新たに設けた「女性コーディネーター」が細やかな配慮で、対応していくことが期待されている。

また、運営委員が着用するビブスを地域企業から寄付して頂いた。ビブスを着用することで、避難者にも誰が委員かわかりやすく、避難所内での問題解決、情報統制にも繋がる。企業・地域を巻き込んで、自分達の避難所をどう運営するのが良いか考えることが大切だ。

(4) 防災と減災について

日常生活の中で、整理整頓、食品の食べ残しをやめる、洗濯物をため込まないなど、出来ることをやっておくだけで、防げたり被害を減らせるものがある。食料の用意として、離乳食やアレルギーがある方などはその準備、インスタントコーヒーやティーパックも張り詰めた状況の中で、ほっとした時間を過ごすことができる。避難所は自宅でもないし、ホテルでもない。避難してきた直後よりも時間が経つにつれて、目に見える誰かの行動が気になっていくこともある。誰かと一緒に過ごす安心感は大いだが、快適ではない避難所を前提に、来るべく時への備えを自ら行って頂きたい。

(5) まとめ

全てを失うということは本当に悲しいことであるが、どんな心を持ち、これからどう生きていくのか。規則、訓練、備蓄も大事だが、一番大事なのは「心」だと感じている。

また地域防災で大事なことは、自分たちの特性を考え、オリジナリティーのある、身の丈にあったものを実践していくことである。そして防災と減災を考えていくと、行きつくのは健康な身体が大切ということだ。逃げるにも避難所でも、健康な身体なしでは大変である。身体を大切にして自分のため、大切な人を守るためにご活躍頂きたい。



開催地より

実際に東日本大震災を経験され、発災時の取り組み、復興期の取り組みを実体験を基に話していただいたので、自主防災組織としての取り組みがイメージでき、防災意識の向上につながったと考えている。今後もさらなる啓発等により、防災意識の向上に努めていきたい。